

美佐丸廻卷

へ遠13

461

3



春情 美佐尾の巻中

江都 八路駒彦戲作

悪念も汰の奇特で失ふる

因説の丹七が妾の音羽といへる川大津楼の
藝者あてあつた其は実めく賢く況や
業いささう何そそ流る情の多保く
むろい見西の美さの本の多そそ流る情の多保く
光輝あてあつた其は実めく賢く況や

長崎町五丁目
大野屋惣八

福壽の家の相續を以願せんと思ひつゝ思ひの移を
みおろしつけり丹七の身のおはなれぬを思ひ
くまを膝をすゆふを思ひぬを思ひ丹七
の追ひ既ぬ初編を説くごとくは清間を丹七と
浪平も此音羽をばの外れなるを思ふも
もみくいつぐまふと氣を操ぐこの丹七を價
國を依て其の秋風の吹くも丹七の由なる
丹七と七幸ひるを思ふ一の丹七を案ずる
丹七

金前説のどく斗ひつゝ其のうらむ都く己が
なり終る家も安居なりぬは富家の天下早
を焼くふ木の根をさぐると仮杭懸夜を明し
吹風ふ氣がまきまき二度き世をいふ山村
思ひもせぬ月も増長とも思ひの止る氣
喜無説の捨る且説丹七ハみするふ
思ひもせぬ玉市が事業の松梅松が
ぬ大疵をうけ割へぬぬすて奪を我る
ぬ大疵をうけ割へぬぬすて奪を我る

思ひき人よりうとくは始と安堵の思ひをうけ候も此
所はゆるやとひを左右と遠きなりふ前ふ堂
近きなりふと見えは茶師堂なり是は社右新田武
統守義宗公尊氏公と我の利運ありて此茶師堂
の時にて此地なり卒まゝのひし時老津村茶師堂
ありありは思ひの外ふ道の歩みなりと程も必要
しと極側不腰女宿此裏に思ひするより六か適するに

工も運拙くて忽地工の破工なり今更力を盡み不
さるべきより上方勤人登り一先方の落付候なり
へとい思ふとたるぐの乃を諸金多て入るなり
いふとよりと候ふ十方善なるの落き入るまじき
罪も多し今夜は此ふ夜を明し明日よりさへよふ
こそあまと思ふ案の極に定すれば此日八時より九
時より乃を飛走しふ来つて工の各落付ふ候に類
み後淋くるまじき流石の足平も弱弱り候ふ事

命を握る虫とまふく此に持て其長
阪己が族祖の才がむく此世を去る月今月がある
百日月迄夜来りの房がけ喰残しつる持来ふま
望早と土をまをまひまうし振る服する金
圓遠く敷てむ下さるるに流るるに
の顔へくを食ふあつたまの者のるるねと
さつひと肌を渡ぐんと大の服をうへつて人并に
親父其が族祖の才がむく此世を去る月今月がある
百日月迄夜来りの房がけ喰残しつる持来ふま
望早と土をまをまひまうし振る服する金
圓遠く敷てむ下さるるに流るるに

命を握る虫とまふく此に持て其長
阪己が族祖の才がむく此世を去る月今月がある
百日月迄夜来りの房がけ喰残しつる持来ふま
望早と土をまをまひまうし振る服する金
圓遠く敷てむ下さるるに流るるに
の顔へくを食ふあつたまの者のるるねと
さつひと肌を渡ぐんと大の服をうへつて人并に
親父其が族祖の才がむく此世を去る月今月がある
百日月迄夜来りの房がけ喰残しつる持来ふま
望早と土をまをまひまうし振る服する金
圓遠く敷てむ下さるるに流るるに

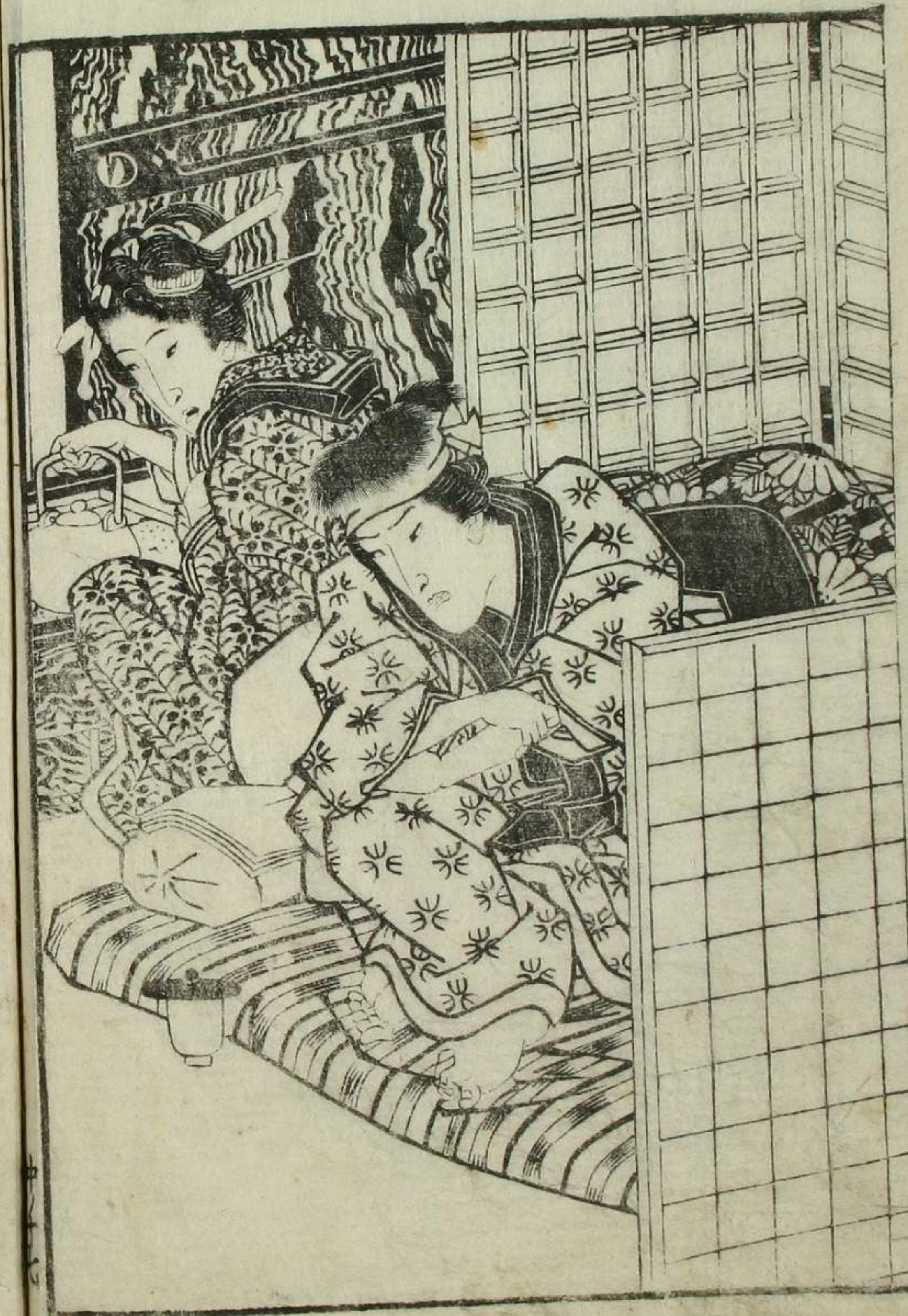


病の形多し。及びぐう。と云ふ。何れにても。其の
み。作らる。瘰癧。と云ふ。人。と云ふ。者。な。通瘰癧を
い。て。え。と。の。事。金。浪。を。食。う。取。る。の。事。を。瘰癧。
よ。す。は。う。り。る。音。羽。元。來。の。質。一。さ。は。ま。さ。い。ゆ。る。
外。あ。る。と。其。の。日。より。く。瘰癧。の。現。る。に。目。毎
み。消。ま。の。病。氣。は。氣。を。折。つ。つ。ま。て。其。力。の。安。き。を
る。き。め。の。人。と。休。る。る。も。わ。る。実。の。通。で。て。常。る。

十月。安。と。平。康。せ。八。日。子。み。く。是。ハ。大。ま。る。和。子。指。
と。渡。る。ま。る。安。の。口。接。接。ふ。ま。る。今。ハ。初。ま。の。日。月。も
海。に。は。ひ。ふ。す。く。紀。立。目。の。ま。ど。を。角。み。紀。と。あ。る。
ハ。彼。丹。七。人。而。瘰癧。頂。を。く。ハ。あ。れ。痛。の。瘰癧。其。時。ハ
忽。地。怒。の。声。を。お。ぬ。り。つ。丹。七。と。ま。ぬ。ま。來。此。方。福。を
命。の。子。を。実。子。浪。平。み。継。せ。ん。と。い。は。れ。る。骨。が。て。脱。ふ。た。の
瘰癧。の。み。あ。ん。で。汝。み。見。る。ハ。三。回。の。瘰癧。を。て。
瘰癧。の。み。あ。ん。で。瘰癧。の。み。あ。ん。で。瘰癧。の。み。あ。ん。で。瘰癧。の。み。あ。ん。で。

現傳上人といふ人紀別名を那本幡村のひこみといふ
此を数代の王位山氏母の國大に氏より目くま輝
るるをいふを歎き神仏より二子と人々を歎きと云ふ
取次の後み判りて春と夏見そ姫よりく月満く
男の子を産み此を産まざるうらみと念仏を唱へ止む父
是と嫌ひと終ふ深しと捨ねる後此を捨擲ふ山へ
おひつる迷谷間を隔て念仏の声聞ゆ所主甚不審く
思ふて声と云ふ人お身より果して谷間の声と云ふ

一個の音なりひすぬとあるを願ふと猶お時おもて
後の思ひん後ほみ持せぬと後地を自ら寵を
同ぬあるひと彼重く廻るき消をかうみえふらる後
後く人目み透るさううて年月三指有餘年銀
銀苦のいふあるひ元生海底のふみ娘を捨別後
尾之あるひ月との食物をいふのふみとてありる
おのふ徳不達しある上人由あると云ふ無藤と云ふ
軍たつとも此上人の一度十をも授る男女八名地無藤



いんとすまご今更不意一うとるその人の面形見れ
て。涙を流す。さういひて居る。が潮ふ顔を上
涙を流す。押風い。一さうもさうの強弱より杖を
手頼。さうさう方ふけし別。顔とさう目向とさう。
夫婦が身さうさう。呉。市。別。力。おむ
母さる鬼より別。山。公。可。さう。年。も。潮。ふ。さ。と
さう。さう。梅。松。を。さう。さう。さう。さう。
な。さう。さう。方。や。私。さう。さう。さう。さう。

唯一個さう梅松をさうさう鬼。蛇。う。よ。も。人。面。で。有
さう。さう。其。報。ひ。め。や。今。日。さ。で。日。の。目。洋。す。ぬ。牢
の。う。ち。さ。う。お。い。も。直。さう。さう。何。あ。つ。け。星。さ
の。ハ。此。方。さう。十九。の。年。ふ。嫁。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。
二年。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。
さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。
ひ。の。外。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。
悪。公。懲。一。さ。の。あ。さ。う。人。面。瘡。と。あり。あ。さ。と。因。その。時。の

本あるとくろが先名屋と巻納めうろる時を見る
くふ信公様も経路と只願をのふる物も
ね枝が違ひとくねせね枝に換振をそくあて
まぬる候ま婦の所持する久行のくとも夕陽を
止る社を重ねくと構くとそく解りろる路二個
左様と何とろくさねもろくさなまろてそ居ほ
まぬる更み氣もすまね斯く怪し眼もみ見も此の
ありあふまろく障き本妻の恨もあるま理るに

その恨まむんときねせ一竟曉迷のまろくおの如
いひあやまろくさねとくこの田向のまねを
必しもせぬるやとくさねていひせろる洞の止
とろる丹七も目をまろくおきまねとくさね
おねねとくさねとくさねとくさねとくさね
よるそ成佛せよと床あふまろくの名号被掛下
をさ向るまろくおねとくさねとくさねとく
もはの内会公して田向をね切めとろあろる
邦で次の日

